みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

35周年を迎えるTBSラジオ
『毒蝮三太夫のミュージック・プレゼント』
誕生秘話

松澤　良昌（TBS）

新兵器・TBS950登場

「ごめんね！文化放送が駄目だって言うんだ」の円鏡さんの一言がすべての始まりだった。

あれは昭和四十四年（一九六九年）、今から三十五年前の夏だった。当時、文化放送は首都圏ラジオ三局の中で聴取率トップの威勢のいい局で、中でも平日午後二時から始まる円鏡さんの商店街からの生中継番組『午後二時の男』は常時7％を超えるお化け番組だった。ニッポン放送も小田急デパートや浅草雷門にサテライト・スタジオを設置して話題を振りまいていた。

一方、TBSラジオはこの年の夏、新兵器として、赤白ツートーンカラーの小型FMカー「TBS950」を三台導入し、首都圏全域を走り廻ってロイヤルリスナーを増やそうと策を練っていた。それには、どうしても円鏡さんみたいな出来上がった人気者が欲しかったし、そのための月～土の午前十時半からの三十分枠が既に決まっていた。

当時の白井制作部長が円鏡さんを文化放送から引き抜くべくあの

勢ぞろいしたキャスタードライバーとTBS950

手この手で口説いてくれたのだが、結果は冒頭の「ごめんね！」だった。いい感触で話が進んでいると聞いていたので、担当プロデューサーの私にとっては晴天に霹靂だった。でも、今から考えれば当たり前の話である。義理堅い世界に生きる円鏡さんにしてみれば、世話になった文化放送に不義理をしたくなかったのが本音だったと思う。

今、私の手元に昭和四十四年七月のTBSラジオの番組表がある。蝮さんの『ミュージック・プレゼント』が始まる三ヶ月前の番組表である。午前中の編成にまだ大きな生ワイドはなく、細かい録音番組が重なった編成の中に、月～土の午前十時から私がプロデューサーだった『奥様Q&A』という五十分の生番組が編成されている。電話をフルに活用して、リスナーとの2ウエー機能を生かした当時としては新しいタイプの番組だった。

「愛情のQ&A」「お金のQ&A」「おかずのヒント」「暮らしのQ&A」の四つのコーナーがあり、一人のリスナーからの質問に、多くの善意のリスナーが回答を寄せてくるという手間のかからない効率的な番組だった。

スタジオのコーディネーターにはベテランの高野昭平アナ、深夜放送のパックで既に名を馳せていた野沢那智さん、そして、声優の近石真介さんの三人が二日づつ担当していた。

特に野沢さんが紹介してくれた新人の近石真介さんの人情味あふれるトークの評判がよく、聴取率も上々で、新しいラジオが生まれそうな予感があった。深水敬郎、伊藤直樹、高階玲子、中村秀男らの若いディレクター達も張り切っていた。

そんな登り調子の番組を、新登場の「TBS950」を生かすための編成替えで潰されるのが悔しかった。その悔しさが、パーソナリティの発掘に積極性を欠いて、白井さんに任せ放しにしていたのだと思う。

既に、編成部ではこの「TBS950」を運転して現場に向かい、時には現場からレポートする新しい職種を〝キャスター・ドライバー〟という名称で募集し、若い男女十名ほどを採用して教育を始めていた。

とり敢えず蝮さんに決める

午前十時半からの放送枠が決まり、「TBS950」という中継の新兵器も決まっているのに、現場に行って、司会進行する肝心の中継タレントの次の当てがなかった。さて、どうしたものかと思っていると、ディレクターの深水ちゃんが「面白い人がいました！」と言ってきた。聞けば毒蝮三太夫だという。

当時、よくTBSラジオに出演

していたタレントの高山栄さん主催の麻雀大会に行って毒蝮と卓を囲んだらしい。やたらに声が大きく、陽気に駄洒落を連発するけど、嫌みがなくて周りの連中も笑い出していたという。普通なら「うるさい奴！」と嫌な感じがするのだが、妙に面白いんですと言う。

毒蝮といえば、立川談志師匠が司会するテレビの『笑点』で座布団運びする姿を見ていた。面白いアドリブができる人だなとは思っていたが、中継現場のタレントにどうか～までは考えが及ばなかった。TBSテレビの『ウルトラマン』にも石井伊吉という本名でアラシ隊員役で出ていたが、あまり見たこともなく、まして毒蝮三太夫の本名が石井伊吉ということも知らなかった。

毒蝮三太夫と筆者（右端）

幸いなことに白井さんとは以前から多少の面識もあって「伊吉なら、面白いかもしれないよ！」と言う。TBSラジオのエース・ディレクターだった白井さんのお墨付きと、若手ホープの深水ちゃんの推薦なら反対する理由はない。私はすぐに乗った。何よりもタレント探しの面倒臭さから解放されるのが嬉しかった。それに「駄目なら代えればいいや！」という私のB型気質のいい加減さが後押ししたのも申訳ないが事実である。面倒見のよい上司と積極的な部下に恵まれて本当によかったと思う。

初めて蝮さんと会った時の記憶は定かではない。前からの友人のように、お互いにすぐに打ち解けて本音で喋りあったような気がする。ギャラは白井さんが一ヶ月十万円で仕切ってくれた。今の金額にして四十万円位だと思う。週六日の外回りのギャラとしては安すぎる。

蝮さん三十三歳、深水ちゃん二十七歳、そして私が三十七歳の昭和四十四年の八月の中頃だった。

自信を持って近石さんに決める

テスト版を作ってみようということになった。スタジオのパーソナリティには同じ時間帯の前番組『奥さまQ&A』で評判の良かった近石真介さんに迷わずお願いした。当時はアニメの『サザエさん』のマスオさん役の声優で売っていたが、艶のある人情味豊かなアドリブ・トークと明るい笑い声が強烈に新鮮だった。

後年、私が昼間の生ワイドのパーソナリティの資質としてラジオセミナーなどで発表してきた「必要な五つの条件」を完全にクリアーした人だった。

①世の中のことを、ある程度、理屈抜きでわかる年齢であること。
②健全な家庭を持ち、子供の可愛さ、家庭の楽しさが肌でわかる人。
③リスナーが一緒に酒を飲みたい。メシを食いたいと思うような人。
④良識ある判断のできる人。
⑤自分の考えを自分の言葉で表現

できる人。

近石さんは当時三十八歳。サラリーマン生活を経て、アテレコの声優をしながら舞台俳優を志す二児の父親だった。

テスト版を作るにも、放送前なのでリスナーからの出前の要請はなく、蝮さんが出かける中継現場がなかった。

仕方なく、私の義妹夫婦が経営する自動車部品をつくるプラスチック工場に頼み込み、蝮さんをFMカーに乗せて出かけて行った。練馬区氷川台にあった「甲商樹脂」である。私の親戚ということも手伝って、好意的な雰囲気の中で和やかに録音が始まった。蝮さんの口から「ババア！」はまだ飛び出さなかったが、『笑点』で顔が売れていたので、パートのおじさんやおばさん達は気軽に談笑してくれた。

打ち合わせ中の近石真介さん（左）

録音を開始して四～五分で、「これは、いける！」と思った。なによりも蝮さんの裸になって人の心に飛び込める天性の技が、きらりと光った。

テスト版で世話になった甲商樹脂はその後『ミュージック・プレゼント』の一回目の現場にもなった。

番組構成は緻密に！

たったの三十分の生番組だが、番組構成には頭を使った。当時のTBSラジオには「リスナーは三分以上も同じサウンドが続くと飽きる。次々にサウンドを代えてリスナーの関心を引き続けないと聞いて貰えない」という言葉が伝承されていた。言い換えれば、パーソナリティのトークは長くても三分以内にして、音楽をかけたり、CMを放送したりしてサウンドを換えないとリスナーが飽きるというのだ。

これはラジオと、ながら聴取のリスナーとの関係を見事に表現した名言だと思う。別の言い方をするなら、三分置きにリスナーの心を釣り上げるフックを配置する。ということである。私はこれを忠実に守った。

①テーマ音楽に続いて、スタジオの近石さんが蝮さんを呼び出して、現場の様子を聞きながら現場からのリクエストを一曲。

②続いて、スタジオに寄せられたリスナーからの葉書を近石さんが読んで、リクエストを一曲。

③現場を呼び出して蝮さんと現場の人々との談笑を聞きながら「あの人の好きな歌」という条件でリクエスト曲を聞き出す。続いてCM送出。

④再び現場を呼び出し、「あの人の好きな歌」をリクエストした人に、蝮さんが「あの人って誰よ？」と根掘り葉掘り聞き出して、曲をかける。続いてCM。

……「あの人の好きな歌」は単なるリクエストと違って、リクエストした人に蝮さんが攻め込み易い口実を与えると同時に、

「故郷の母がよく唄っていた歌謡曲です」とか、「死んだ祖母が好きだった小学唱歌です」など、フックとペーソスに満ちたコーナーになっていった。

このアイディアは当時、『パック・イン・ミュージック』のナチチャコで有名になっていた熊沢ディレクターと雑談している時に貰ったものだ。

⑤番組の最後は、当時マスコミで流行りだした「占い」で、その日ツキがある「干支」を電話で聞くコーナーで、ラジオ東京放送劇団に在籍したことのある本物の占い師の池田夢民さんに頼んだ。

こうして三分刻みでテンポよく進行するように全体を構成した。近石さんも、蝮さんも当然のことながら台本はなく、Qシートだけで、すべてアドリブで勝負した。

マイク持つ手が震えてた

こうして、昭和四十四年十月六日（月）午前十時半、現在も使われているチャカポコ・チャカポコといった感じのテーマ音楽に乗って『ミュージック・プレゼント』はスタートした。このテーマは三十五年前に深水ちゃんが選曲したものである。

初日に中継現場に行った五十嵐ディレクターは、マイクを持った蝮さんの手が小刻みに震えていたのを見ている。

制作スタッフは、新たに加わった五十嵐弘至デスクを筆頭に深水敬郎、高階玲子、中村秀男と私の五人だった。みんなラジオが好きでよく動いた。

笑いがあふれる放送現場

スポンサーは営業の三沢副部長が走り廻って、最初から食品総合商社の「東食」をつけてくれた。その上、スーパー店頭から毎日でも放送したいスポンサーサイドの希望を週二日に絞ってくれた。

八百屋さん、魚屋さん、理髪店など働きながらラジオを聞いている人々が目の前にいる普通のお店からの週四日の中継が番組を育ててくれたのだと思う。

当時、街には由紀さおりの『夜明けのスキャット』や森進一の『港町ブルース』が流れていた。

あれから三十五年！

現在のミュージックプレゼントは蝮さんの「ババア！話芸」の独壇場で、音楽も二曲かかるチャンスがあるらしいが、それもワン・コーラスでもかかればいいほうである。とてもミュージック・プレゼントなんて言えないが、蝮さんの話芸で現場は沸きに沸き、三分刻みの構成の必要はなくなっている。

スタート当時、近石さんと蝮さんは毎晩のように電話で今日の出来具合をチェックし、反省し、相談していたらしい。それは二人

の仲を親密にすると同時に、番組にも反映してきた。近石さんの「蝮さんよう～」という親しみを込めた呼びかけや、蝮さんの言い過ぎた発言に、「蝮さん！そりゃないぜ」などリスナーの心を代弁して近石さんは喋るようになった。

番組の評判は次第に高まり、蝮さんへの出前希望の葉書も増えていった。

蝮さんが「ババア！」と親しみを込めて言い出したのも自然のなりゆきだった。

今になって「ババア～とはなんだ！」という抗議から、スタッフが蝮さんを守ったとお褒めの言葉を頂くことがある。でも、スタッフは蝮さんの真意と現場の温かい雰囲気を知っているので、全く気にしていなかったのが真相である。

また、心あるディレクターにとって、蝮さんの現場はリスナーの本当の姿が見える研修の場だった。「そうか、こんな人がラジオを聞いているんだ！」とリスナーの実像を知ったディレクターは自信を持ち、制作する番組が素直にリスナーに伝わるようになっていった。

当時、現場からの帰りのTBS950の車内で、「毎日、毎日、走り廻ってTBSラジオのシンパを組織しているのだから、将来的に凄い番組になるよ」と興奮して蝮さんと二人で励ましあったことを昨日のことのように覚えている。

スタートして一年後、ミュージック・プレゼントを核にして午前九時からの二時間ワイド『こんちワ近石真介です』が当然のように始まった。レーティングは見る見る上がり、現在までTBSラジオは午前の時間帯のトップを独走している。

テスト版を作った時、占いの池田夢民先生に、お遊びで「この番組はどうなりますか？」と聞いたことがある。先生は真面目な顔で笠竹をはじいてから「松沢さん、この番組は凄い番組になりますよ。TBSラジオの屋台骨を支える番組になります」と言い切った。そして、その通りになった。あれ以来、私は占いを信じている。

スーパーの店長さんも出演者

お客さんの整理もする蝮さん

写真提供
TBSラジオ

元キャスタードライバー　森 奈保子